クラシカル・ユンギャンに対する素朴な疑問
―トラウマと個性化の停滞との関連から見た夢の理解―

Critical Questions towards Classical Jungian Approaches: on the understanding of dreams in terms of trauma and stagnant individuation

広　瀬　　隆
Takashi Hirose

Abstract

The purpose of this paper is to summarize some critical questions towards classical Jungian approaches in regard to wounding and trauma. A number of classical Jungians believed that persecutory nightmares might be on opportunity to improve ready-built consciousness. This is an interesting concept for clinical practice. However when we meet clients with severe or early trauma, we often encounter dreams on which we cannot place this kind of classical hypothesis. Some persecutory dreams do not seem to have the purpose of improving the consciousness. The important question of this study is what we can consider about these kinds of nightmares and how we can meet clients with severe or early trauma. The author has adopted Kalsched's concept "self-care system" and demonstrated new approaches towards traumatic memories or experiences. The author has suggested that therapists may move away from a classical approach, aiming at reintegration and trying to hold dissociated fragments in the therapeutic container, while respecting dissociation as a defense mechanism to protect clients.

Keywords : Classical Jungians and Post Jungians, trauma, dreams, self-care system

１．はじめに

ユング（Jung, C.G）が1961年６月６日に死去し、既に45年以上が経過した。ユングを直接知るユング派の第一世代はすでに高齢となり、一線で活躍する分析家は少なくなった。ユングの愛弟子であったフォン・フランツ（von-Franz,M.L.）は、筆者がスイスに向けて発つ前の1998年２月に死去し、ユングを取り巻いていた女性の弟子たちは姿を消した。フォン・フランツの著書は日本でも訳され数多く出版されている。筆者も「永遠の少年」「男性の誕生」を心の支えにしていた時代がある。滞在した1999年から2002年でもすでに、直接ユングを知る人たちはまばらで、我々

学生の直接の教育分析家やコントロール・アナリスト（スーパーバイザー）はユングを知る世代の一つ下の世代－1930年代から40年代生まれの分析家たちが大半であった。いくぶんか筆者なりの見方の偏りがあることを承知であえて書くとすると、精神分析がカリスマ的な働きをすることを嫌い、当初はユング研究所を設立することそのものにも乗り気ではなかったユングは、皮肉にも時に学派内における超越的存在のままであったのだろう。「ユングが言っていた。」と言うことが自らの正当性を主張する支えとなることもあったのであろう。直接そうは言えない分析家たちの中のある者は、自分の理解に従って「これこそユングが求めていたことだ。」と自分の発言を意味づけているようであったし、「コフートやウィニコットでなくユングを読め。」と言う人に出会うこともあった。スイスに渡った当初は、分析家ひとりひとりの背景がわからなかったが、その内ゆっくりと自分の臨床感覚により近い分析家に知らず知らずのうちに接近していくことになったように思う。ユング派分析家の資格を取得した今、スイスに初めて渡ってからのこの７年間を振り返ってみると、ヒルマンをはじめとした元型学派の強力な魅力にひかれながらも、徐々に自我の形成不全や安全感のもてなさを問題とする発達学派に近づいてきた気がする。

分析心理学の発達学派というと、誰しもチューリヒよりはロンドンを思い浮かべるだろうし、タビストック研究所の向かいにあるロンドンのユング研究所、そしてフォーダム ,M.（1969）を連想するであろう。フォーダムはセルフの概念を中心に、自我の形成過程を「統合―脱統合－再統合」（integration-deintegration-reintegration）の循環過程として説明するものである。自我と無意識の関係を考慮に入れ、かつ自我の統合機制を問題にするとき、非常に有益な理論である。そして、彼は発達学派を代表し、ノイマン ,E.（1973）の「自我―セルフ軸」（the ego-Self axis）概念と対にして、分析心理学の代表的な発達論の１つとしてあげられている。（例えばサミュエルズ A.（1985））

ところが彼の著作に私はどうも肌が合わないのか、ユングの深淵で広大な世界をあまりにも制限しているもののように感じられた。そんなわけで、スイスに行くまでは発達学派といえば「ロンドンで対象関係論と結びつき、こころの深みとの結びつきを失っている。」という偏った見方をしていた。

スイスに行ってもブックリストにあるクラシカル・ユンギャンの書物を好んで読んでいた。お気に入りの著者は日本ではあまり取り上げられないウィットモント ,E.（1962, 1992）であった。アメリカに渡ったユンギャンの一人で、彼の“Symbolic Quest”は座右の書の１つとなっている。夢については、バルツさん（Barz, E.）のセミナーの教科書としてあげられていたウィットモントの著書“Dreams―A Portal to the Source”がケースワーク実習を始める際の助けとなった。

そんなふうにどちらかというとクラシカル・ユンギャンに親しんでいたのであるが、ユング派の分析家を目指す前はクライン、英国対象関係論や中間派と呼ばれる発達的な考え方にも大いにひかれていた。自分の中で、まとまりのないままいくつかの観点が散在していたのだろう。そん

な中、分析家であるディアン（Couseneau-Brutsche, D.）からあるとき１冊の書物を薦められた。教育分析の中で、それほど多くの書物を薦めるわけではないディアンが示した書物はカルシェッド ,D.（1996）の“The Innerworld of Trauma”であった。彼の主要概念の１つである「自己－ケア・システム」（self-care system）については後に述べることにする。ここでは、まず、資格論文“Trauma and the Arrested Development of the Ego-Self Axis”の最後に Appendix ２（補足２）として挙げたクラシカル・ユンギャンに対する筆者の疑問点を以下にそのまま採録し、その訳文を記しておくことにする。そして、いかにこうした疑問が頭をもたげることになったかについて記し、タイトルをあげてトラウマとの関連からクラシカル・ユンギャンに対する疑問点をあげ、今後の研究の方向性を明確にしていくことを目的とする。

２．Critical Questions towards Classical Jungian Approach in regard to Early Wounding and Trauma（早期外傷やトラウマに関する古典的なユング派のアプローチに対する疑問点）：資格論文“Trauma and the Arrested Development of the Ego-Self Axis”（トラウマと自我―セルフ軸の発達の障害）に記した appendix ２（補足２）

“After the author completed the thesis, the thesis advisor Dr. Kathrin Asper advised him to raise all his questions towards Jungian theories. The author thought that it was good for future exploration even if he might not have answers at that time.（筆者が論文を完成したあと、論文指導者であるカトリン・アスパー博士は、筆者にユング派の理論に対する疑問の全てを挙げるように助言した。筆者はその時点では解答はえられないにしても、今後の研究のためには大切なことだと考えた。）

（１）One important aspect of the concept of individuation which charms us is the self-actualization of the unconscious. Yet, at the same time the ego’s evaluations are also vital, and thus we should not take on a passive approach believing that the ego surrenders to the unconscious at all times. The evaluations and situations of the ego should be considered sufficiently, and the harmonious yet occasionally hostile interactive relationship between the ego and the unconscious is what is truly important.（我々を魅了する個性化概念の重要な側面の１つは、無意識の自己実現である。しかし、同時に自我側の判断も重要であり、自我は常に無意識に屈するという受動的なあり方をとるべきではないのではないか。自我側の判断や状況も十分に尊重されるべきであり、自我と無意識との協調的な、そして時には敵対的な対話的関係こそが重要なのではないか。）

（２）Even if everything we experience is the product of our destinies tinted by synchronicity,

it may be wrong to simply emphasize the aspects that should be accepted. Occasionally, having received only sour wine, the ego which has experienced an early trauma becomes incapable of seeking sweet wine. For the ego which has been unable to attain autonomy, to say “No” to its destiny may lead to discovering clues for new development.（我々が経験する全てがシンクロにシティーに色づけられた運命の産物であるからといって、受け入れるべき側面ばかりが強調されるべきではないのではないか。早期の外傷を経験した自我は、苦い杯ばかりを提供され、甘い杯を求められなくなることがある。自律性を獲得しがたかった自我にとって 運命に対して“No”と言うことは、新たな発達の糸口を開くことにつながるのではないか。）

（３） It is questionable whether it would it be right to assume that dreams always possess objectives for the development of the consciousness or the implementation of individuation. Would we be correct to consider that nightmares which overwhelm the ego are seeking the reformation of the ego? Occasionally, nightmares manifest repetitions of the same suffering toward a traumatized ego. Perhaps, certain nightmares indicate the possible approaches for the ego in which it maintains some stability by means of stagnation after its development became inhibited.（夢は常に意識の発達や個性化を促すという目的をもつと仮定してよいであろうか。自我を圧倒する悪夢は自我の刷新を求めていると考えていいのであろうか。トラウマを背負った自我にとって悪夢は、時に同じ苦痛の反復を示す。発展が阻害し停滞することでそれなりの安定を保つ自我のあり方を、ある種の悪夢は示しているのではないだろうか。）

（４）For clients obsessed with early traumas, it is probably necessary to build an active relationship like that of a mother and her infant. As well, regarding the approaches by the unconscious toward the ego, it may be necessary to implement an active intervention similar to that of the controlling mother prefetching or postponing her infant’s experiences.（早期外傷にとらわれたクライエントに対しては、母親が乳児にかかわるように積極的な関わりを必要とするのではないか。無意識の自我に対する働きかけにおいても、母親が乳児の経験を先取りしたり先送りしたりしてコントロールするような積極的な介入が必要なのではないか。）

（５）Analytical psychology has, as its charm, paradoxical perspectives of discovering shadow among light and finding possibilities for life in death. However, it is possible for these views to become an overwhelming light of analytical psychology, forcing shadows onto the fragile ego and bringing about an end with nothing but lightless shadows as well as death which does not lead to life. Most likely, it is necessary to possess common-sense morality and ethics which can confine

shadows and evil.（分析心理学は光の中に影を見出すとか死の中に生の可能性を見るとかいう逆説的な観点をその魅力としてもつ。しかし、そうした見方が分析心理学の圧倒的光となり、脆弱な自我に影を押しつけ、結局は光のない影や生に結びつかない死をもたらして終わりとなる可能性もあるのではないか。影や悪をとどめる日常的な道徳や倫理も必要とされるのではないか。）

（６）The Self proposed by Jung is governed by the Christian male principle, thus the image of fixed and absolute God may be overlaid onto it. When putting the ego-Self axis under examination, possibilities for the salvation of a damaged ego become generated by supposing that the Self gains possibilities for transformation at the same time as the ego. As Jung implies in his autobiography, he may have considered the manifestation of Sophia forming the female principle to be the clue for salvation from the absolute and persecutory Self.（ユングの想定したセルフはキリスト教的な男性原理に支配されており、固定的・絶対的な神のイメージが被せられているのではないか。自我―セルフ軸を問題にするとき、自我と同時にセルフも変容の可能性をもつと想定することによって、傷ついた自我の救済の可能性が開かれるのではないか。自伝の中でほのめかされているように、ユングは女性原理であるソフィアの顕現が絶対的で迫害的なセルフからの救済の糸口と考えたのではないか。）

（７）Most likely, a profound difference in meaning exists between the usage of the I Ching and fortune-telling by Westerners, with their rationality-based egos as their premises, and the usage of the I Ching and fortune-telling, which have been re-imported through Jung, by Asians who are easily influenced by irrationality. For the ego which has missed an opportunity to develop its autonomy, the significance sometimes lies rather in making efforts against the result of the fortune-telling.（合理性を基調とした自我を前提とする西洋人が易をたてたり占いをするのと、非合理性に流されやすい東洋人がユングを通じて逆輸入した易や占いをするのとでは大きく意味が異なるのではないか。自律性を育てる機会を逸した自我にとって、占いの結果に対して挑むことにむしろ意味があるのではないか。）

３．トラウマと運命

分析心理学の大きな魅力の１つは、人がそれぞれ固有の人生の中で無意識との対話を通して個性化を遂げるという考え方である。ヒルマン ,J.（1996）の著書「魂のコード」が人を引きつけるのはそうした観点である。比喩的に言えば、人にはそれぞれ運命の声が吹き込まれた一粒のどんぐりがある。人はその実現可能性の中で生きている。しかし、時にその呼び声を見失う。それを見出すために人はセラピーを求める。それは、心理療法家からの適切な助言をえるためにあるの

ではなく、無意識からの呼び声を聞き、自らの与えられた「どんぐり」の特質と方向性を確認するためである。人はそれぞれに固有の種を与えられるが、種がどのように成長するか、未来を予測することは誰にもできない。我々はどんぐりが大地を必要とするのと同じく、つねに精神的生命の源としての無意識との接触を必要とする。生ける無意識との接触を失った時、樹木が大地との接触を欠くかのように、意識は存在の基盤を喪失することは間違いない。

「無意識との接触を回復し、本来の自分を取り戻す。」という希望に満ちたテーゼである。ところが無意識は思いもかけず我々にその刃を向けるものとして体験されることがある。それは自我が無意識に対する適切な態度を取っていないからだろうか。どんぐりがたまたま生き延びるにはあまりにも過酷な環境におかれた時にはどうすればよいのか。これは我々と自然との関係にもなぞらえることができる。ある人が熱帯の森の中で原始的な生活を送ることに決め、人生の後半分をブッシュマンと同じような暮らしをして文明社会ではえられなかった人間性を回復したとしよう。しかし程なく、彼はマラリアにかかり高熱にあえぎながら死亡するかもしれない。これは、彼が自然に対する畏敬の念を忘れ自然との適切な関係を築けなかったからであろうか。それとも彼が熱帯で経験した自然とは所詮はそんなものなのであろうか。

分析心理学は、「影」や「悪」をも概念として用い、キリスト教の三位一体を前提とした光の宗教観に対して人間の闇の部分にも言及した。個性化の目標は「完全」(perfection) ではなく「全体」(wholeness) であるという観点はある１つの救いをもたらした。あまりにも硬直し、ドグマにとらわれた「善」は生命を凍らせる。それは、多くの人が体験することであり、既成の宗教に救いを見いだせない大きな理由の１つである。しかし、同時に分析心理学のこの側面を強調しすぎると、無意識の可能性を重視するあまり、自我の主体性を軽視することにつながりはしないだろうか。「受けいれざるをえない運命」「影を背負う人間」－この２つのフレーズがあまりにも安易に分析の世界に入り込み、何をも許容してもよいのであろうか。そんなことをすれば、時に自然としての無意識に飲み込まれて翻弄されてしまうのではないか。我々は自分の主体性を放棄したかのように、無意識のもつ運命の道筋と人間くさいが故の過ちに身を投じるべきだろうか。無意識という自然に対して、違った態度を必要とするのではないだろうか。例えちっぽけでも、運命にさいなまれながらも、我々にはまた戦う権利も与えられているのではないか。そして逆説的なことだが、戦うことを通じて、独自の運命の方向性が開けるのではないか。こうした疑問を出発点とし、トラウマと個性化という課題を通して、無意識の否定的な側面に対し、トラウマからの自我の主体性の回復という点について今後研究を進めたい。

４．悪夢に“No”と言うこと

悪夢をどう意味づけるか、という基本的な疑問が本研究の出発点であった。夢の中で苦悩する夢自我を目の前にした時に、分析家としてはいかなる態度をもってそれを聞くのかという問題で

ある。例えば、Dieckmann,H.（1978）のあげている短い夢の例を取り上げてみよう。

「私は処刑場に連れて行かれ、首をはねられる。」

「死の背後にはいつも再生がある。」というのがディークマンの前提である。夢主は情緒的に強い不安を感じながらもこの過程を引き受け、無意識によって肯定される変容に身をゆだねるとしている。情緒的には恐怖を経験しながらも無意識の意図に従うという両価性を体験し、未来指向性に導かれるというわけである。確かに、夢の中の死が再生とつながるように感じられる場合も多い。しかし、「死と再生」を前提とする解釈仮説は、「死」をすぐさま新たなる「生」と結びつけ、「死」を推奨するかのような危険にもつながる。また、もし反復する死の場面の夢に対して、この仮説を押しつけると、いつまでも変容しない自我の態度の誤り探しをすることにもつながりかねない。

古典的な悪夢についてのもう一つの古典的な仮説は、意識が抑圧し統合できない影の側面が迫害的人物として現れるというものである。これは分析においてはしばしば実りのある洞察をもたらす解釈仮説である。例えば、激しい怒りが殺人鬼として襲いかかってくるが、それを自らの内にある破壊的な衝動の可能性として思いめぐらせば、その殺人鬼のイメージも変容する、そして、破壊的と思われた力も自我の制御の及ぶ自己主張や人生を開拓する力として成長を遂げるという仮説である。この考え方は、しばしば臨床場面で適用されるであろうし、筆者の経験の中でも有効だと感じられる。しかし、破壊的な力を自らの影と読む仮説にはあるトリックが含まれている。つまり、破壊的な力を無意識的な力であるとすると、誰も論理的に否定できないのである。「あなたは無意識的に破壊的である」という言葉に意識は反駁しようがないのである。そして、時に、あまりにも過剰に責任を個人に負わせてしまうことになる。

以上の２つの古典的な解釈仮説も、被分析者の個人史や今の人格のありよう、外的状況などを考慮した場合、妥当と考えられる場合も多い。そこには、意識を越えた無意識の意図を想定でき、目的性を見いだせるので、夢を用いた深層心理学の面目躍如となる。

しかし、われわれが苦悩を経験する時、そこには常に個性化を目指す無意識の意図が隠されていると言えるだろうか。神の暗黒の側面は、われわれの命をむさぼり食ってほくそ笑むということはないのだろうか。「死は再生への契機である。」という希望をもつ一方でわれわれは「死の背後にただ空虚がぽっかりと口を開けている。」というもう一方の可能性を見ておく必要があるのではなかろうか。

ディークマンを初めとした古典的なユング派の夢についての前提は、生死にまつわる深刻な状況を生き延びた人たちが見る侵入体験としての反復する悪夢を説明できないのではないか。例えば、阪神淡路大震災に出会った人の中には、その直後から現実と寸分違わないと感じる危機状況

の夢を反復的に見る人がいた。もし、こうした夢に「死の背後にはいつも再生がある。」という前提を押しつければどうなるだろう。地震のサバイバーが運命によってもたらされた人間の影の側面を受けいれず意識の変容を遂げられないが故に悪夢が反復夢として現れる、とでもいうのであろうか。ある深刻なトラウマに直面してきたクライエントを前にした時、私にはそうした前提は到底受けいれられない。

このような疑問が起こるのは、臨床的には、反復する悪夢が繰り返し報告される場合が典型例である。筆者は実習中にトラウマを負ったいくつかケースを引き受けることになった。ある30歳代半ばの女性はパニック発作の症状をもち、過去のことを見つめないといけないと思い心理療法を受けることを決意した。彼女は、企業戦士の父親と良家出身の母親をもち、幸せな日々が約束されているはずだった。３～４才の頃から彼女は自分では理解できない場面に何度も出会った。抑うつ状態にあった父親が目の前で階段から転げ落ちたり、手すりを乗り越えて高い所から飛び降りたりしようとする場面が幾度も回想された。彼女は、10代も後半になった頃、父親が抑うつ状態にあり、最終的には自殺したのだと知らされた。父の自殺後、母は外に男を作り、お金だけを残して家事をすることもなく、ほとんど家を空けていた。ケアする親もないまま、彼女は、母が置いて行くお金で暮らし、５つ年上の姉とほとんどの時間を過ごした。父の残した財産のために金銭的には不自由しなかったようであるが、母親からの養育と呼べるものはほとんど受けずに生き残った。実習ケースとして筆者が受けいれ、夢を持参してもらうことにした。深刻なトラウマを負ったケースの例外に漏れず、彼女は過去からのひどい情動的負荷を感じてはいるものの、それを具体的な記憶として想起するのは難しかった。しかし、意味づけられないまま、映像としては浮かんでくるスクリーン・メモリーを経験していた。そして、彼女はそうした過去を拾い出したいと感じていた。そんな中、彼女は、現実にもあり得たであろう素材を含んだ夢をいくつも報告するようになった。彼女は毎回過去の苦しい場面が走馬燈のようにちりばめられた10数個の夢を持参した。もちろんファンタジーでつなぎ合わされてはいるが、彼女には過去のリアリティーをもつものとして体験された。彼女は夢の断片を積極的につなぎ合わせる過去の再統合を行っているように思われた。１時間足らずの内に扱う素材としては、重荷であろうとは感じつつも筆者は彼女の真摯な態度に付き合うことにした。ところが、ある時、10あまりの過去の体験の素材を多く含む夢について話している途中に、彼女はパニック発作の前に体験するような息苦しさや胸の鼓動を訴えた。筆者は夢からの連想作業を中止し、ゆっくり進めることを提案した。「夢が出現するからといって夢の全てが我々に味方するわけではない。」という基本的な問題提起がこの時筆者にはっきり現れた。そして、夢をお告げであるかのように万能視すべきではないことをはっきり認識した。つまり、それまでは夢の流れについていくことが分析家の仕事であろうと考えていたのだが、ある種のケースでは、分析家側の配慮をもっと積極的に働かせた方がいいと感じたのである。このケースでは、「これだけの夢は彼女には重荷すぎるだろう。」という筆者自身の内

なる声に従って、夢に触れないなり、制限するなり、なんらかの行動を起こした方がよかったと思えたのである。

幸運なことに、こうした疑問のただ中にいる時、筆者が出会ったのがカルシェッド ,D.（1997）の迫害夢についての見解であった。カルシェッドの迫害夢についての見解を明確にするために、引用されている典型的な不安夢を引用し、トラウマと結びついた元型的不安に対する防衛という仮説を明確にすることにしよう。

「私は若い少女のグループと運河に浮かぶハウスボートの虜になっている。インクを流したような暗い夜である。船長は私たちを１人ずつ殺そうとしている。私は私と足を鎖で繋がれている１人の少女と逃げようとするが，彼女は弱くてついてこられず，とうとう私達は捕まえられる。その少女が浅い水の中に横たわっている。私は息ができるように彼女を鎖で引き上げようとしている。しかし，そのつど水に沈む。船長はこれを喜んで眺めている。そしてやってきて，靴で彼女の喉元を踏みつける。私は悲しみと怒りで打ちのめされる。」

この夢では、拘束された少女と夢見手が対になっている。この夢が報告されたのは、夢見手が分析の中で分析家を信頼しだし子ども時代の苦しみを語り出した頃であった。鎖でつながれた少女は傷つき、普段は防衛機制により表には立ち現れない夢見手の人格部分と考えてよかろう。分析を開始することにより、ようやく自我とこの人格部分は結びつきを発見したのであろう。ところが、船長が捕虜を殺害し少女を苦しめる。そして、息ができるように試みる夢見手の努力にもかかわらず、船長として現れた迫害者は少女を靴で踏みつける。船長は少女の息ができないこと、つまり生を獲得しないことを喜ぶのである。

試練が全て個性化に役立つという結論はあまりにも安易な人生論である。カルシェッド（1996）はこうした「激しい元型的な内容が「心の知恵」ないしセルフに導かれる統合的な個性化の一部とは思えない。」と記している。「こうした迫害者は、個人に責任を帰すべき影の内容ではない。ところが、ある古典的なユング派のグループでは、「おそらくその人の中の何かが死なねばならない」と楽天的に解釈するのが常であった。」と記している。早期トラウマを経験していない多くの神経症水準の事例では、迫害的な夢に補償を読みとれることも多いであろう。しかし、トラウマ、特に早期のトラウマを抱える事例では、夢の重荷が既成の自我の許容範囲を越えている。そして、夢の目的が新たなる統合であるとは考えられず、むしろ経験の統合こそもっとも恐ろしい避けるべき事柄だと思われる。迫害的人物は自己の経験を破壊し、統合しないことを目的としているかのようである。新たなる経験、広くて深い心を目指して滅びるよりはともかくも生き残ることを目的としているかのようである。内的には弱くて傷ついた像とサディスティックで破壊的な像が対をなしている。典型的に現れるこうした「対」（tandem）はトラウマに大きく影響され、

変容よりはともかくも生き残ることを選んだ人の状況を説明する夢として典型的であると思われる。彼はそこで元型的な「自己ケア・システム」という概念を提唱した。「自己ケア・システム」はユダヤのスローガン「二度と再び」（Never again!）で表されるような標語を掲げ、新たな経験の可能性をなくしてしまうのである。

5．悪夢の理解―カルシェッドの「自己ーケア・システム」を巡って

カルシェッド（1998）が述べるように、古典的なユンギャンは夢の中の迫害者を意識の刷新のための促進者と考えた。発達的な観点を問題としないとき、中年期における個性化の重要な局面として、苦難を位置づけ、新たなる再生のためのきっかけと考えることもできる。しかし、自我が経験として統合しがたいほどの外傷や寄る辺のない発達早期の環境を視野に入れたとき、自我は原初的な防衛によって経験を遮断し、再統合の機会を閉ざされることがあるだろう。

「ひどいトラウマを背負った人間がどうして生きていくのか。」この問題は筆者が仕事を続けていく上での大きな問いである。元型の力は大きく、自我をはるかに超越する力を及ぼすことは認めざるをえない。しかし、本当に元型は過去の傷を刷新できるのだろうか。我々は歴史的事実そのものを変更することはできない。できるとすれば、同じトラウマを人生の中で異なった文脈の中で体験し意味づけることであろう。そして、人格の構造奥深くに刻み込まれた個人神話を書き改めていくことが必要となるだろう。この「事後性」（deferred action）への取り組みがトラウマを負った人への重要なセラピーの指針であることは疑いの余地がない。しかし、大きな心的外傷体験を背負ったクライエントと出会うと、苦しみを単に「脱統合」の契機と受けとめることはできないとつくづく感じさせられる。苦しさが圧倒的な力を持って襲ってくるとき、自我は経験としてそれを受けとめられず、解離やその他の原始的防衛によって経験を閉ざすことがしばしば観察される。その結果、意識はその経験の可能性を閉め出し、無意識との生きた結びつきが損なわれる。その時、セラピストがクライエントの態度を批判し、「経験を受けとめるだけの強さがない」と結論づけたところでクライエントの役には立たない。かといって、苦痛な経験の可能性の締め出しを擁護し、「脱統合」を経て「再統合」に至るプロセスをたどらずに停滞するあり方を援護して慰めを与えることでは救済はえられない。「癒し」の名の下に「救済」の道が必ず伴う苦難を排除することで癒しをもたらそうとする態度も、統合可能性を排除するものとして批判されるべきである。

アスパー ,K.（1987）は早期幼児期の自分を愛する能力に障害をもつ自己愛障害を「影に覆われた自己」（overshadowed self）と記述している。個性化の影を統合するという課題をセラピーの目標として採用できない一群のクライエントについて彼女は記している。早期外傷やトラウマを問題にするとき、筆者は、「影」（shadow）という用語を２つに分けて考えるのが適当ではないかと思っている。１つは、適切な環境が与えられれば発達的に順を追って統合されるはずの影の問

題、もう一つは意識的な生活をとりあえず築き上げたあとで問題となる人生後期の課題としての影である。前者は、トラウマによって統合の機会を得られないとき、心的内容が解離を初めとした機制によって非統合のまま置かれているという意味における個人的な影である。もちろん、影の方が分類のための切れ目をもってあるわけではない。人生の早い段階で統合すべき影と、人生後半まで先延ばしにすべき影の２つの側面を、意識の側から弁別しておくことが必要なのである。overshadowed の over は自我との関連で論じられるだろう。重要な例としては、攻撃性があげられるだろう。お腹が一杯になった赤ん坊が乳房を差し出されてそれを拒絶する。しかし、ある環境のもとでは、これとてままならないだろう。この時、自らの攻撃性は影として留まり、安全のために封じられる。拒絶と結びつく攻撃性が統合されるのは、人生前半を乗り切るために必要である。これは近い将来の自己主張の起源となる。自我がある強度をもつことは人生後半の個性化には不可欠である。しかし、自我が弱いときも、温室に自我を隔離すべきではない。まったく攻撃性が必要のない楽園に我々は住めないのだから、影のある側面は人生の早期に統合されるべきである。そして、影とつながった「悪」（evil）との境は我々の意識がつくらざるをえないのである。

カルシェッド（1996）は「想像を絶する不安」に対処するために停滞を選んだ自己のあり方を個性化を犠牲にした「サヴァイヴァル自己」（survival self）として描いた。そこでは、危険を冒してまで個性化を図るよりも安全に停滞して生存することが無意識的に選択されているのである。彼の鍵概念は「自己ケア・システム」（self-care system）と呼ばれ、元型的な不安を避けるためにこの自己ケア・システムが保護者であると同時に迫害者ともなるという仮説を提唱している。

トラウマの結果としての自己ケア・システムは、とりあえず自己を生き残らせるために新たな経験の余地をきわめて縮小した状態を作り出す。カルシェッドが破壊者として働くだけではなく、保護者としても働くというのはこの点についてであり、心の免疫システムと例えられる。あまりにも大きな外傷経験をもった自我は、例え「出来事」の中に身を置かれようとも、金輪際「経験」しないことを誓って生きている。個性化が無意識や外界の出来事との対話を通して、新たな心的発達を作り出すプロセスであるとすると、自己ケア・システムは、全ての経験が意味をもたないようにし、あらゆる事象を単なる出来事として過ぎ去らせ、自我と心的資源との接触を切断するのである。こうした自己ケア・システムの働きが象徴的に示されたものとして、トラウマ的な夢を理解できるのではないかと考えられる。

６．セラピーにおけるセラピストの役割について

侵入する外傷記憶にどう関わるか、フラッシュバックにどういう態度で臨むか、カプセルに入れられ封印された体験にどう対処するかという問題は、クライエントに関わるときに大きな問題

である。我々の統制を越えて苦痛な体験は我々に有無を言わせずのしかかる。「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなた方を耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道をも備えてくださいます。」（コリントⅠ・10・13）という道徳的態度は、時に人に救いをもたらす。しかし、本当に全ての苦難は試練としての目的を備えているのだろうか。そして、再結合は約束されているのだろうか。

トラウマ研究の啓蒙書ともいうべき「心的外傷と回復」の中でハーマン , J.（1992）が示した回復過程は、まず安全を確立し、次に想起し、そして再結合を図ることである。ヴァン・ダー・コルク B.A.（1996）をはじめ、日本の西沢（1997）でも示されているこの方針は、多くの臨床家に取り入れられている。しかし、現在は生理学的な研究の成果も踏まえ、この再結合に関わる治療方針が再検討される段階にある。ここで鍵となるのは臨床家の役割である。経験を統合すべく出来事に近づくのか、それとも解離を容認することによって安定を保つのか、それともこの両方の可能性を踏まえつつ第３の道を探るのか。臨床家が悪夢に対しても、トラウマに対しても、どのような見解をもっているかは臨床実践に大きく影響する。

人が自ら自我と無意識の関係の相克を解決できないほどのものと感じたときに分析関係が重要な役割を果たす。分析家は単に「容器」として機能するだけではなく、非分析者の自我に見合うだけの素材を分析的関係という「容器」に注ぐさじ加減をする必要があるのではないだろうか。夢は確かに重要なこころの素材ではある。しかし、それを神からの啓示のごとく文字通りに受けいれることは危険であろう。夢を意識と無意識との相克の結果現れた自然の産出物と考え、分析家と被分析者がそれをどう意味づけどう関わるかによって人生の物語に大きな影響を与えるのである。夢が心の自然としての自律性をもつのと同じく、分析家もそして被分析者も無意識という自然に立ち向かう時に自律性が必要とされる。そのためには、我々は無意識とのつながりを求めるだけではなく、この世の大地にしっかりと立つための基盤を築き上げることも大切な課題である。こうした自我の強化は、再統合よりもまず優先される課題なのではないだろうか。それは、時に食事をしっかりとり、服を着替えるという小さなステップから行わないと仕方のないこともあるだろう。あるいはヴァン・ダー・コルク B.A.（1996）が示しているように、喜びをもたらしてくれるような身体的活動や創作活動があたらな体験の源となることもある。セラピストは、再結合を急ぐよりも、解離をはじめとした防衛機制を容認し、かつ解離された断片を入れ込む容器を保ちつつ、新たな成長への契機をともに探すことが必要とされるのである。

７．終わりに

以上、資格論文執筆中に頭をもたげてきた観点についてまとめ、今後の研究のための指針をえる試みを行った。これまで、再体験や再統合こそトラウマへのセラピーの主眼と考えられる向き

があった。しかし、必ずしも統合しこころの中の分裂を解消することだけが目的ではなく、むしろセラピーという容器の中に解離の起こっている状態をも保持するという態度が重要ではないだろうか。また、一方で現実生活を生き、自我の強化を図っていくことが、重要な方針となるのではないか。この点については、今後のトラウマ研究の理論的展開を見守ると同時に、臨床的にも検証される必要がある。そして、個性化を推進する「逆境」のもつ意味についても考察していく必要がある。トラウマに関する“post traumatic growth”やパパドポロス ,R. の言う「逆境が賦活する発達」(adversity-activated development) は、今後トラウマと個性化の問題を考える上で重要な概念の１つとなるだろう。

参考文献

Asper, K.（1987）: The Abandoned Child Within. Fromm International Publishing Corp. : 老松克博訳（2001）自己愛障害の臨床－見捨てられと自己疎外 . 創元社 .

Dieckmann, H.（1978）: Träume als Sprache des Seele Einführung in die Traumdeutung. Verlag Adolf Bonz GmbH. 野村美紀子訳（1988）: 魂の言葉としての夢 ユング心理学の夢分析 . 紀伊國屋書店 .

Fordam, M.（1969）: Children as Individuals. Free Association Books.

Herman, J.（1992）: Trauma and recovery. Basic Books. 中井久夫訳（1996）: 心的外傷と回復 . みすず書房 .

Hillman, J.（1996）: The Soul's Code : In Search of Character and Calling. Warner Books Inc.: 鏡リュウジ訳（1998）: 魂のコード 心の扉を開く . 河出書房新社 .

Kalsched, D.（1996）: The Inner World of Trauma: Archetypal Defenses of the Personal Spirit. Routledge. 豊田園子監訳（2005）: トラウマの内なる世界－セルフケア防衛の働きと臨床－ . 新曜社

Kalsched, D.（1998）: Archetypal affect, anxiety and defense in patients who have suffered early trauma. In : Casement, A.（1998）: Post-Jungians Today; Key Papers in Contemporary Analytical Psychology. Routledge. p.83-102 : 氏原寛訳（2001）ユングの13人の弟子が今考えていること―現代分析心理学の鍵を開く . ミネルヴァ書房 .

Neumann, E.（1973）: The Child-Structure and Dynamics of the Nascent Personality. Hodder and Stoughton. : 北村晋他訳（1993）こども . 文化書房博文社

西沢哲（1999）: トラウマの臨床心理学 . 金剛出版 .

Samuels, A.（1985）: Jung and the Post-Jungians. Routledge. 村本詔司・村本邦子訳（1990）: ユングとポスト・ユンギャン . 創元社 .

van der Kolk, B.A.（1996）: Traumatic Stress: The Effects of Overwhelming Experience on Mind, Body, and Society. The Guilford Press. 西沢哲監訳（2001）: トラウマティック・ストレス―PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて . 誠心書房 .

Whitmont, E.（1969）: The Symbolic Quest - Basic Concepts of Analytical Psychology. Princeton.

Whitmont, E., Perera, S.B.（1992）: Dreams, a Portal to the Source. Routledge.